

No. 22

『人文社会科学論叢』

March 2013

アンヌ・ド・ブルターニュの記憶と ロワールの古城

今 林 直 樹

はじめに

1. ナント
2. ランジェ
3. ブロワ

おわりに—再びナントへ—

註

はじめに

フランス最長の河川であるロワール川流域にはフランス中世史を彩る古城が数多く点在している。シュノンソー城、シャンボール城、ソミュール城、ヴィランドリー城、シノン城など、優美な景観と多様な建築様式、そして何よりも古城が伝える豊かな歴史の記憶が今もなお多くの観光客を惹きつけてやまない。

本稿では、こうしたロワールの古城の中からアンヌ・ド・ブルターニュ（Anne de Bretagne、以下アンヌ）の記憶が残る古城を取り上げ、その記憶から描かれるアンヌのイメージをブルターニュの歴史と現在を考察するヒントとしたい⁽¹⁾。

本稿でアンヌを取り上げる理由は次の3つである。

第1に、ブルターニュにおけるアンヌのシンボル性である。アンヌは、1477年1月25日、ブルターニュ公フランソワ2世（François II）の長女としてナントに生まれた。アンヌが、父の死後、わずか12歳でブルターニュ公位を継承した頃、ブルターニュ公国は勢力拡大を進めるフランス王国の前に存亡の危機を迎えていた。アンヌは、公国のフランス王国への併合をねらったフランスの政略によりシャルル8世（Charles VIII）とルイ12世（Louis XII）の2人の国王に嫁するという運命を背負いながらも、フランス王国への併合からブルターニュ公国を守りとおした。こうしたアンヌの生涯はブルターニュの人々の記憶に深く刻まれ、ブルターニュのシンボルとして語りつがれていくことになるのである。

第2に、フランス王国との関係である。アンヌの結婚に関しては当時のブルターニュを取り巻く国際環境を反映した紆余曲折を経た後、1491年12月6日、フランス王シャルル8世との結婚が秘

密裏ではあったが成立する。その後、アンヌは1497年4月7日のシャルル8世の死を受けて1499年1月8日には後継国王ルイ12世と再婚し、再びフランス王妃となる。一方でアンヌはブルターニュ公としての地位も堅持した。従来、そうしたアンヌにブルターニュとフランスとの対立を見る視点が支配的であったが、むしろそこに共存を模索する姿勢を見るという視点も成立しうるのではないか。アンヌの姿勢は公国の独立かフランスへの併合かという二律背反的なものではなく、ブルターニュとフランスとの共存という公国を取り巻く国際環境における現実的な選択肢であったとも考えられるのである。

第3に、現代におけるブルターニュ地域主義の表れとしてのブルターニュ再統合との関係である⁽²⁾。現在、ブルターニュはフランスにおける地域圏という行政単位を持ち、イル・エ・ヴィレーヌ、モルビアン、コート・ダルモル、フィニステールという4つの県で構成されているが、かつてはナントを中心とするロワール・アトランティック県を加えて5県であった。しかし、ロワール・アトランティック県（但し、当時の名称はロワール・アンフェリウール県）が第2次世界大戦中の1941年にブルターニュから切り離されて以後、同県はブルターニュに属すには至っていない。4県で構成されるブルターニュを「行政的ブルターニュ」(La Bretagne administrative)、5県で構成されるブルターニュを「歴史的ブルターニュ」(La Bretagne historique)というが、今日でも「歴史的ブルターニュ」の実現を模索する動きはナントを中心に活発である。そうした現代のブルターニュをめぐる動きの中でブルターニュのシンボルとしてのアンヌの記憶が利用されていくのである。

以下、本稿ではロワールの古城の中からアンヌに関連したナント、ランジェ、プロワに残る城を取り上げ、アンヌの生涯をたどりながら今日に伝わるアンヌの記憶と現代におけるその役割について考察していく。

1. ナント

ナントはロワール川が大西洋に注ぐ河口付近に位置する都市である。ロワール川は河川交通としても商業的に重要な役割を果たしていたため、その意味でもナントは重要な都市であった。行政的にはペイ・ド・ラ・ロワール地域圏の圏庁所在地であり、ロワール・アトランティック県の県庁所在地でもある。また、歴史的には1598年4月13日にブルボン朝のアンリ4世(Henri IV)が、ユグノー戦争の終結に向けて、個人の信仰の自由を認めた「ナントの勅令」を発布したところとして知られている。

ナントにはアンヌに関する2つの記憶が残る。

第1に、ナントはアンヌの出生地であり、幼少期を過ごした地であるということである。アンヌは、1477年1月25日、このナントにあるブルターニュ公城で生まれた。父はブルターニュ公フランソワ2世であり、母はフランソワの再婚相手であったマルグリット・ド・フォワ(Marguerite de Foix)である。アンヌはここナントでフランソワーズ・ド・ディナン＝ラヴァル(Françoise de Dinan-Laval)からギリシャ語やラテン語、数学、法律、歴史などの手ほどきを受け、教養豊かな女性として成長していった。

しかし、その一方で、アンヌのブルターニュ公女としての平穏な生活を脅かす状況が進行していた。当時、ルイ 11 世治下のフランス王国は王権と王領の拡大を図っており、その勢いはブルターニュ公国にも迫ろうとしていたのである。すでに、アンヌの生まれる直前の 1477 年 1 月 5 日にはブルゴーニュ公シャルル・ル・テメレール（Charles le Téméraire）がフランスと戦ったナンシーの戦いで敗死し、この敗戦を受けてブルゴーニュ公国は王領に併合されていた。フランス王国では、1483 年 8 月 30 日にルイ 11 世（Louis XI）が亡くなった後、翌年 5 月 30 日にシャルル 8 世が即位したが、シャルルが若年であったことを理由にシャルルの姉のアンヌ・ド・ボーージュウ（Anne de Beaujeu）が摂政を務めることとなった。ブルターニュ併合への動きはこのアンヌ・ド・ボーージュウの下で加速していくことになる。1486 年 2 月 10 日にはアンヌがフランソワ 2 世の公位継承者として正式に承認されたが、フランスの勢いはとどまることなく、1488 年 7 月 28 日にはブルターニュ公国はサン・トーバン・デュ・コロミエの戦いでフランス王国に敗れた。さらに、それから 2 カ月にも満たない 9 月 9 日にはフランソワ 2 世が亡くなり、ブルターニュ公位をめぐる内紛も発生して、以後、アンヌは波瀾万丈の人生を歩んでいくことになるのである。

第 2 に、アンヌがルイ 12 世と結婚式を挙げたのがナントのブルターニュ公城であったことである。前述のとおり、アンヌは、シャルル 8 世の死後、フランス王位を継承したルイ 12 世と 1499 年 1 月 8 日に再婚し、再びフランス王妃となる。但し、アンヌとルイの関係については後述することとし、ここではこの事実を確認するとどめたい。

ところで、2002 年 7 月、ブルターニュ公城の前にアンヌの銅像が据えられた（写真 1）。



（写真 1）ブルターニュ公城前のアンヌ像（筆者撮影、2010 年 11 月）

彫刻家ジャン・フレウール（Jean Fréour）がナント市庁からの注文を受けて制作したものである。フレウールは 1919 年 8 月 8 日にナントで生まれたブルトン人で、このアンヌの彫像をはじめ、ブルターニュに関する彫像を数多く残している。このアンヌ像について、フレウール自身はナントが

文化的にも歴史的にもブルターニュに帰属するという事実をこの銅像に表現したということであり、事実、ベルナル・ジネスト（Bernard Gineste）は、ナントを訪れた人々がこの像を見るときナントがブルターニュに属することを思い出すであろうし、アンヌの姿には何世紀にもわたるブルターニュ・アイデンティティの諸問題が具現化していると述べている⁽³⁾。その意味でこのアンヌ像こそはナントがブルターニュに帰属することを象徴するモニュメントとなっているのである。この点については、ブルターニュ再統合の動きと関連させて後述することにする。

2. ランジェ

ランジェはトゥレーヌ地方の中心都市トゥールからやや西に位置する小さな町である。元々、ランジェ城は、994年、アンジュー伯フルク・ヌラ（Foulque Nerra）がプロワ伯との対立を背景に建設した要塞であった。ランジェ城にアンヌの記憶が残っているのは、1491年12月6日、ここランジェ城でアンヌとフランス国王シャルル8世との結婚式が行われたからである。なお、この翌日にはアンヌとシャルルはランジェを後にしてアンボワーズへと向かっているので、ランジェにおけるアンヌの記憶はこの1日に凝縮されているといつてよいであろう。しかし、歴史に刻まれたこの日の結婚式こそアンヌとブルターニュの運命をフランスと共にすることを決定させた象徴的なものであった。

ここでアンヌの結婚について少し触れておく必要がある。アンヌとシャルルの結婚式は極秘裏に行われたが、それには次のような理由があった。すなわち、アンヌはこの結婚に先立つ1年前の1490年12月19日に、後に神聖ローマ皇帝となるハプスブルク家のマクシミリアン（Maximilien d'Autriche）と代理結婚をしていた。代理結婚ということでマクシミリアン本人は不在であったが、この結婚が正式に執り行われたものであり有効であることは間違いなかった。

アンヌとマクシミリアンの結婚は、フランスにとって2つの点で問題であった。第1に、その結婚は条約違反であった。ブルターニュ公国とフランス王国との間には、1488年8月19日、ヴェルジェ条約が締結されていた。これは同年7月28日のサン・トバン・デュ・コルミエの戦いでの敗北を受けてブルターニュがフランスと締結したものであったが、アンヌの結婚についてはフランス国王の承認が必要とされていた。アンヌとマクシミリアンとの結婚はそもそもフランス国王の知るところではなかった。第2に、当時のヨーロッパにおけるフランスの地位低下の恐れである。アンヌはマクシミリアンとの結婚に先立つ1490年10月27日、マクシミリアンとイギリス国王ヘンリー7世（Henri VII）との間で結ばれた反フランス連合に加わった。フランスは東の大国であった神聖ローマ帝国の脅威を取り除くためにシャルル8世とマクシミリアンの娘マルグリット（Marguerite d'Autriche）との間で結婚の約束を取り交わしていた。アンヌとマクシミリアンとの結婚は両国の関係に亀裂を生じさせることになるだけでなく、神聖ローマ帝国がフランスに対する将来的な脅威となり、結果としてフランスの地位が低下する危険性を伴うものであった。こうして、摂政アンヌ・ド・ボーージュウはヴェルジェ条約違反を理由にブルターニュに介入し、アンヌとマクシミリアンとの結婚を無効と決めつけ、さらにシャルルとマルグリットの結婚も反故にしてアンヌとシャ

ルルとの結婚を強引に進めていったのである。なお、この時にアンヌとシャルルの間で交わされた契約には、シャルルが後継者を残すことなくアンヌよりも先に亡くなった時にはアンヌは後継国王と結婚するという内容が盛り込まれた。これはアンヌ・ド・ボーージュウが是が非でもブルターニュをフランスに併合するという意思の表れであった。

1491年12月6日、上記のような理由でアンヌとシャルルの結婚式は極秘に執り行われた。現在、ランジェ城にはこの結婚式の様子がマネキンを用いて再現されている。マネキンは彫刻家のダニエル・ドゥルエ（Daniel Druet）、衣装はダニエル・オジエ（Daniel Ogier）が担当した。現在、残っている肖像画をもとにアンヌ以下、シャルル8世、アンヌ・ド・ボーージュウ、ルイ・ドルレアン（Louis d'Orléans、後のルイ12世）などが忠実にマネキンとして再現されている。ランジェ城を訪れた人々はここに再現された結婚式の場面を見、音声で流れる解説を聴いて、アンヌに思いを馳せることになる。シャルルの後ろに立って鋭い眼光でアンヌを見つめるアンヌ・ド・ボーージュウはここでは完全に悪玉であり（写真2）、それに対してアンヌは善玉としてアンヌ・ド・ボーージュウによってフランス国王との望まない結婚を強いられる「悲劇のブルターニュ女公」というイメージを固定されることになるのである（写真3）。



（写真2） アンヌ・ド・ボーージュウ（筆者撮影，2012年10月）



（写真3） シャルル8世（左）とアンヌ（右）（筆者撮影，2012年10月）

しかし、アンヌとシャルルとの結婚生活はわずか6年半で終わりを告げる。その理由は1498年4月7日にアンボワーズ城でシャルルが事故死したことによる。これには毒殺説もあるが定かではない。しかし、これでシャルルとの結婚に際して結ばれた先の契約に盛り込まれていた内容、すなわち、アンヌよりも先にシャルルが後継者を残さずして亡くなった場合には後継国王と再婚すると

いう取り決めが現実となっていくのである。

3. ブロワ

後継国王となったのは、かつてブルターニュに身を寄せ、アンヌとは旧知で、しかもサン・トールバン・デュ・コルミエの戦いではブルターニュ公フランソワ 2 世とともにブルターニュのために戦い、敗北してフランス軍に捕らえられるという過去を持つルイ・ドルレアンであった。ルイが王家に連なる出自でありながらフランス王家に対抗したのはフランス国王ルイ 11 世との対立による。ルイはシャルル 8 世が生まれるまでは王位継承順位第 1 位、シャルルが生まれた後も第 2 位の位置にいたが、ルイ 11 世はそのルイに対して自分の娘ジャンヌ・ド・フランス (Jeanne de France) を嫁がせた。しかし、ジャンヌは身体に障害を持ち子どもを産むことができないとされていた。そこにオルレアンの血を絶やそうとするルイ 11 世の意図を見ることができ、1483 年 8 月 30 日にルイ 11 世が亡くなり、シャルル 8 世が即位するとルイは次第に王家から離れ、1487 年 1 月 11 日にはブルターニュ公国に亡命する。そして、サン・トールバン・デュ・コルミエでの敗北でフランス軍に捕らえられたルイはブルジュの塔に幽閉されるのである。

ブロワはこのルイ・ドルレアンの出生地であるが、ブロワに残るアンヌの記憶は 2 つある。第 1 に、アンヌがルイ 12 世との再婚後、居城としたのがこのブロワ城であったことである。ルイ 12 世はアンヌとの結婚を積極的に進めたが、前述のとおり、当時のルイはジャンヌ・ド・フランスと結婚していた。そのため、アンヌと結婚する前にまずジャンヌとの離婚が認められることが先決であった。ルイ 12 世はそのために時のローマ教皇アレクサンドル 6 世 (Alexandre VI) と交渉し、教皇の息子であったチェーザレ・ボルジア (César Borgia) に領土を付与し結婚をととのえることを条件にジャンヌとの離婚を認めさせた。こうしてルイはアンヌとナントにあるブルターニュ公城で結婚式を執り行うことができたのである。

ブロワ時代のアンヌについては、先王シャルルの時とは異なりアンヌの政治的手腕が指摘され、自らがブルターニュ公の地位を保持するとともに、フランスとの関係についても従属的な立場から対等に近い立場へと変えたとされ、そこにはシャルルとの 6 年半に及ぶ宮廷での生活で鍛えられたアンヌの政治力が反映しているとされる。シャルルとの結婚に終止符が打たれた時アンヌは 22 歳になっていた。アンヌの政治力をうかがわせるのは、例えば、シャルルが亡くなったわずか 2 日後の 1498 年 4 月 9 日、アンヌはシャルルによって廃止されていたブルターニュ大法官府を再興するとの命を出したことである。この決定がアンヌ個人の決定によるか否かは定かではないが、近臣の助言によるものだとしてもブルターニュ公国のためにアンヌが取った非常に迅速な対応であり、その点だけでもそれまでのアンヌとは異なっていることが推測される。さらにアンヌは 9 月 28 日にはブルターニュの中心都市であったレンヌで議会を開いている。こうした動きはフランスからのブルターニュの独立性を強めるものであり、フランスにとっては想定外であった。先に見たルイ 12 世とジャンヌ・ド・フランスとの離婚裁判はこの年の 8 月 10 日から 12 月 17 日まで続き、その間、アンヌはブルターニュ公国のために打てる手を打ったということになるであろうか。こうしたアン

ヌの行動がルイ 12 世との関係、ひいてはブルターニュとフランスとの関係にも影響を与えていくのである。

アンヌとルイの関係は日常生活においては幸福なものであったとされる。ルイはアンヌのことを Brette（「ブルトンっ子ちゃん」とでも訳すべきか）と呼び、夫婦仲はよかったとされる。プロワ城にはアンヌの頭文字の「A」とルイの頭文字の「L」、そしてそれぞれのエンブレムである「白テン」と「やまあらし」がそこかしこに見受けられ、そこにアンヌとルイが実在していたことを感じさせる。アンヌとルイの間には 5 人の子どもが生まれているが、長じたのはクロード（Claude de France）とルネ（Renée）の 2 人の娘だけである。アンヌとルイが結婚したその年に誕生した長女のクロードは後にアングレーム公フランソワ、すなわち後のフランス国王フランソワ 1 世（François I）に嫁ぐことになる。

プロワにおけるアンヌの記憶の第 2 は、アンヌがプロワ城でその生涯を終えたことである。アンヌの生涯はわずか 37 年でしかなかった。アンヌはシャルルとの間に 6 人、ルイとの間に 5 人の子どもを出産したが、1512 年 1 月 21 日に男子を出産した後、産褥熱のため身体が衰弱していき、やがて病床から離れられなくなっていった。その間もフランスを取り巻く国際関係は動いており、ルイはとりわけイタリア遠征に係り切りであったが、そのルイを支えるようにアンヌはローマ教皇に書簡を送るなどできる限りの外交努力を行っていた。そうした中、アンヌは、1514 年 1 月 9 日、病状が一変し、その生涯を閉じるのである。

おわりに―再びナントへ―

最後に再びナントに戻ることにはしたい。

アンヌの遺体はプロワからパリに運ばれ、2 月 16 日にサン・ドニ大聖堂へと運ばれた。しかし、アンヌの遺言により心臓だけはアンヌの遺体から取り出され、丸長の形をした金の容器に入れられ



（写真 4） アンヌの心臓が収められていた容器（筆者撮影，2010 年 11 月）

てナントにもたらされた。3月19日のことである。現在、その容器はナントにあるドブレ博物館で見ることができるが（写真4）、心臓はフランス革命の混乱のさなかに失われてしまった。

さて、21世紀を迎えたばかりの2001年6月22日、ペイ・ド・ラ・ロワール地域圏に属し、ナントを県庁所在地とするロワール・アトランティック県の県議会が同県のブルターニュ地域圏への編入を可決し、その翌月にはレンヌを地域圏庁所在地とするブルターニュ地域圏の圏議会がそれへの同意を可決した。先述のとおり、ナントを中心とするロワール・アトランティック県は、1941年6月30日、当時のヴィシー政府によってブルターニュから行政的に切り離されたが、同県はいわゆる「歴史的ブルターニュ」の構成単位であり、その地域アイデンティティは「ブルターニュ」にあった。ナント市民にとってブルターニュへの復帰は半世紀以上にわたる悲願であった。ナントにはブルターニュの記憶を留めているものがあつた。それはブルターニュ公城であり、ブルターニュ公フランソワ2世の眠るナント大聖堂であつた。しかし、何よりもナントがブルターニュに属することを証するものこそアンヌの記憶であつた。アンヌはブルターニュ史上最も敬愛されてきた人物であり、ブルターニュのシンボルであつた。そして、ナントはアンヌの出生地であり、アンヌが遺言によって、自分の死後、自分の心臓とともに戻りたいと願った地であつた。

長く語り継がれてきたアンヌの記憶は、アンヌの死から500年近くの時を経て、ブルターニュ再統合という目的の実現のために、フレウールのアンヌ像となって表象化された。先の表現を換言すれば、ナントがブルターニュに属することを証するためにアンヌの記憶が利用されたといえよう。2001年のロワール・アトランティック県議会のブルターニュ編入要求の可決とブルターニュ地域圏議会のそれへの同意から10年以上が経過したが、ブルターニュ再統合は依然として実現してはいない。しかし、現在でもナントを中心にそれは要求されているし、今後も続いていくであろう。そして、それとともにアンヌの記憶も様々な形で表象化され続けていくのかもしれない。

註

- (1) アンヌについては以下の文献を参照。

Pigaillem, H., *Anne de Bretagne*, Pygmalion, 2008.

Le Fur, D., *Anne de Bretagne*, Librairie Édition Guénégaud, 2000.

Tourault, Ph., *Anne de Bretagne*, Perrin, 1996.

Dascotte-Mailliet, P., *Anne deux fois reine*, Les Livres qui marquent, 2006.

Minois, G., *Anne de Bretagne*, Fayard, 1999.

Le Boterf, H., *Anne de Bretagne*, France-Empire, 2002.

Anne de Bretagne, Somogy Édition d'art, 2007.

山内 淳、「アンヌ・ド・ブルターニュ：二度フランス王妃になったブルターニュの女公爵」『日本大学芸術学部紀要』38、2003年、39-52頁。

山内 淳、「アンヌ・ド・ブルターニュ：アンヌとシャルル8世の結婚」『日本大学芸術学部紀要』39、2004年、119-131頁。

山内 淳、「アンヌ・ド・ブルターニュ：いまふたたびフランス王妃として—アンヌとルイ12世の結婚」『日本

大学芸術学部紀要』40、2004年、87-100頁。

山内 淳、「アンヌ・ド・ブルターニュ：フランス王国とともに」『日本大学芸術学部紀要』42、2005年、79-92頁。

山内 淳、「アンヌ・ド・ブルターニュ：ブルターニュ公国再興のために」『日本大学芸術学部紀要』41、2005年、25-36頁。

- (2) ブルターニュ再統一については、次の文献を参照。

Martray, L. et Ollivro, J., *La Bretagne réunifiée une véritable région européenne ouverte sur le monde*, Les Portes du large, 2002.

- (3) Gineste, B.éd., *Jean Fréour : Anne de Bretagne (bronze, 2002)*, in *Corpus Étammois*, <http://www.corpusetampois.com/ca-e-21-jeanfreour-annedegretagne.html>, 2005.